

されている。その中で、機関科出身の筆者は、最後まで機械、機関室勤務であった。

戦局が、いよいよ熾烈を極める折、昭和十九年末ごろ、南方補充隊に転勤の命を受けて、今度はオンボロの「一〇八号哨戒艇」勤務となり、ここでもまた機械室、機関室など灼熱の暑さのなかで燃料係りとして油の補給に、水の補給にと多忙な日々を送ったことを記述している。

そして水上警備隊の基地でも、乗艦する艦もなく、二十五歳以下の独身者で「南天特別海軍攻撃隊」と命名された特攻隊が編成されている。長さ六メートルの内火艇に二トンの爆弾を積んで敵艦を襲撃する。まことにお粗末な断末魔の攻撃作戦を露呈しているのである。

伊十九潜奮戦記

石川県 横山 晋介

昭和十六（一九四一）年五月三日、私は海軍水雷学校における第二期普通科水中測的術練習生の教程を修了し、配乗先は幸運にも熱望していた潜水艦乗り組み四人の中の一人として選ばれた。

配乗艦は四月二十八日に竣工を終えたばかりの最新鋭の「伊号第十九潜水艦」であった。

私は、前年の九月に三等水兵に進級したばかりの若年兵で、半舷や入湯上陸の折、軍帽に「大日本第二潜水隊」のペンネットを付けているので、行き交う古参兵に不審がられ「お前は特三か」と問いかけられたり、帝国海軍始まって以来の「立錨」の潜水艦乗りとも言われた。

乗艦の際、発射管室へのハッチを降りかけたとき、強烈な印象を受けたものは、赤白段だらに塗り分けられた救難ブイで、その表面には「伊号第

十九潜水艦ここに沈没せり」の銘板と「至急最寄の役場か警察へ・・」の文言が書かれてあった。改めて潜水艦勤務の厳しさをひしひしと感ぜられ、肅然と襟を正したものである。

間もなく第六艦隊第一潜水戦隊に編入されて、開戦に至るまでの六カ月間の猛訓練に入ったが、これは実に苛酷を極め、火の出るような明け暮れの毎日であった。

大東亜戦争の開戦時には、第二潜水隊の僚艦二隻と共に機動部隊の前哨戒隊として、ハワイ空襲作戦に参加し、機動部隊の引き揚と共に先遣部隊に復帰して、ハワイ海面の監視・哨戒に従事中心であった。

十日朝、伊六潜の発見した空母を求めて追従を続けるうちに米西海岸近くまで到達したので、引き続きロスアンゼルス港外で交通破壊戦を開始して大型貨物船二隻を撃破した。

そして帰途、搭載機を発進して真珠湾偵察を行い、横須賀出撃以来二カ月ぶりにクエゼリン基地

に帰投した。

二月一日、敵空母の艦載機が同基地へ来襲した。休む間もなく前甲板の飛行機格納筒を改造して、航空燃料補給施設の工事を行った。

この施設が完成した後、二機の二式飛行艇に、潜水艦により、途中一回の燃料補給を行い、マーシャル基地から再度ハワイ攻撃をする「K作戦」を成功させることが出来た。

第二段作戦は北方部隊に編入され、ダッチハーバーの飛行偵察や哨戒とアリュウシャン作戦を支援し、六月三十日、先遣部隊に復帰、七月七日、横須賀へ入港、ドックに入り、鋭意艦体の整備を行った。

今回の作戦はペナン、シンガポール方面に回航して、すでにインド洋方面に進出中の潜水部隊と共に、インド洋上に猛威を振るい、潜水艦戦の真価を発揮せんものと期待していた。

ところが、昭和十八年八月七日、米軍はソロモン諸島南部のガダルカナル島へ反攻上陸を開始し

た。

このため我が陸海軍は、ラバウルから、米軍はニューヘブライズ諸島の各根拠地からガダルカナル島へ必死の増援を繰り出し、また日米互いに、これを阻止せんとして、海・空軍は全力を挙げて戦っていた。

当時、このソロモン諸島東方海域は米軍の増援船団の通路であり、これを掩護する空母を主体とする機動部隊の出没する海面でもあった。その時期、同方面海域には第七潜水戦隊所属の比較的老朽艦五隻だけが、ガダルカナル島周辺に行動していた。

直ちに「海大型」の潜水艦、第二・第三潜水戦隊の数隻がこの海面に投入されて、敵の増援艦船の捕捉、攻撃に必死の努力を続けていた。

我が第一潜水戦隊の最新鋭潜水艦も八月中旬に、急遽、この海面に進出を命ぜられた。

八月十五日、旗艦「伊九」、第二潜水隊の「伊十五」「伊十七」「伊十九」及び第四潜水隊の「伊

二十六」は横須賀より、第十五潜水戦隊の「伊三十一」「伊三十三」は呉より指定海面へ急航した。

横須賀の五隻は東京湾を出て南方諸島に沿って南下し、父島列島の東方付近から二十カイリの間隔を開いて対潜警戒の「之の字運動」をしながら、昼夜兼行、十六ノットの速力で水上航行で突っ走った。

二十日ころから敵の哨戒圈に入ったのか、突如、雲間より敵の大型哨戒機の襲撃を受け、投弾されたが、急速潜航で間一髪、この難を逃れた。

以後の行動は、昼間潜航、夜間は水上で進撃することとなった。

八月二十三日、第一潜水戦隊の七艦は、同日夜から二十四日の天明までに、ソロモン諸島のサンクリストバル島とサンタクルース諸島のヌデニ島の間配備を完了した。散開の順序は東から「伊二十六」「伊十九」「伊十七」「伊十五」「伊三十一」「伊三十三」「伊九」の順序であった。

二十五日と二十六日に敵空母を含む数隻を発見

したが、距離も遠く、態勢も悪く、攻撃できず、一同切齒扼腕すれど水中速力が遅く、何らなすすべもなく見逃すほかなかった。

八月二十九日、ヌデニ島のグラシオサ湾の飛行偵察を行い、三十一日深夜、同湾の飛行艇基地に對して一四センチ砲の砲撃を行った。同日僚艦の「伊二十六潜水艦」が「レキシントン」型空母を攻撃してこれを撃破す」との入電があった。

九月十四日、百マイル南下したインジスペンサブル礁の東方付近に配備点が変更された。赤道を越えてなおはるかな南緯二〇度の海域、毎夜の見張りにおいて目に付くのは、果てしない水平線と頭上に輝く南十字星だけである。

内地で見慣れた北極星は、はるかな水平線のずーっと下だろうか、僅かに大熊座の片鱗が見えるだけである。

ある夜、浮上して艦橋に上ると、前甲板にたくさん魚がピチピチ跳ねている。捕らえてみると飛び魚で、思わぬ贈り物に一同の無聊ぶりようを慰めるに

十分であった。

十五日、ガダルカナル島東方約二百マイル、ニユーヘブライズ列島との中間に南西から北西に一線に並んだK散開線（数隻の潜水艦が二十マイル間隔で並ぶ）の中央に位置し、潜航して南南東に進んでいた。当直交代で水中聴音機について全周を捜索していると左前方に異常な音を感じた。

確信を持ってぬまま、しばらく様子を見ていたが、移動は少ないが、音源幅は広く、どうも集団音らしく思われたので、午前九時五十分、思い切つて司令塔へ報告する。「音源らしきもの左××度感度二」、哨戒長は直ちに「深さ十八」と令して潜望鏡を上げ、ぐるりと周囲を見回したが「何も見えない、良く測れ」と、半ば怒るような哨戒長の声が伝声管から返ってくる。

しかし間違いなく、その音は伝わってくる。哨戒長との間での「聞こえる」「聞こえない」という押し問答が聴音室と司令塔の間で繰り返された。十時五十分、再び潜望鏡を上げて周囲の観測を

したところ、左真横およそ一万五千メートルに空母一隻、巡洋艦一隻、駆逐艦数隻が北北西に進んでいるのが潜望鏡に入ったようだ。反航態勢である。艦長の「敵航空母艦発見！ 総員配置に就け！」と感激に震えるような号令が各区の伝声管より伝わってくる。引き続き「魚雷戦用意！」が下令され、全員の士気はいやがうえにも奮い立った。だがまだまだ攻撃できる態勢ではなかった。

潜航したまま増速して敵艦方向に進出していったところ、幸運にも敵空母は、数時間前に索敵のため発艦した索敵機の着艦・収容作業のため、この水面下に恐るべき刺客が息を潜めて待ち伏せていることも知らず、我が方に変針して近づいてくるのである。護衛の巡洋艦四隻、駆逐艦六隻が空母を中心にして堂々の輪形陣である。

木梨艦長は満を持して、さらに肉薄し、十一時四十五分、距離九百メートル、方位角左五〇度の必中射点で、全射線六本の九五式酸素魚雷を発射した。

「発射用意！ 打て！」との艦長の号令。緊張の一瞬、魚雷は艦内にズンと響く空気圧音を残して、次々と発射されていった。

発射と同時に私は、秒時計を押し計時した。魚雷は独特の音を発して次第に遠ざかる。三十秒、三十五秒、四十秒、次第に心臓の鼓動が激しくなってくる。四十五秒を過ぎたころ、カチン、グワーンと命中、私は思わず受聴器を取り外す。

続いて二、三、四発、私は「命中音四発！」と司令塔へ報告した。

この襲撃直後、艦長は「深々度潜航」を令して、深度八十メートルに潜入して敵艦「ワスプ」の航跡の下に隠れた。約六分経過後から敵駆逐艦の爆雷攻撃が始まった。

我が潜水艦は爆雷防御のため艦内の各区画の防水扉を固く閉ざして無音潜航に移り、ジーッと敵の攻撃に耐えている。「シャワ、シャワ」と次第に接近する敵艦の推進器音、「ポシャン、カチン、ドーン」と爆雷の音もだんだん近づいてくるのは

何とも無気味である。

全員が息を潜めている艦内は四〇度を越す高温で、空気は次第に濁って来る。しかし我慢を続けるほかはない。戦果を確認できないまま潜航を続け、いつもの浮上時刻を過ぎても、思い出したように敵の執拗な爆雷攻撃があるので動けない。

さらに一時間ほど過ぎてから、ようやく敵艦の爆雷攻撃は絶えたようであった。それまで八十五発の爆雷攻撃を受けたが、我が艦「伊十九潜」は無傷であった。

午後八時十分、「伊十九潜」は、ようやく闇の海上に黒い姿を浮かべることが出来た。乗員一同は「めっぼう」旨い空気を胸いっぱい吸い、勝利の感激をかみ締めることが出来た。

数日後、連合艦隊司令長官より祝電を受けた。

『先遣部隊が其ノ真価ヲ發揮着々敵ノ堅鋭ヲ屠リ大イニ戦果ヲ挙ゲツアルヲ多トス。現戦

勢ニ鑑ミ一層ノ勇戦敢闘ヲ期待ス』

なお戦後判明したところによると、「ワस्प」

に命中した魚雷は三発で、同艦の前方を通過した残り三本は約一万メートル離れて東方を航行中の空母「ホーネット」を中心とした艦隊に到達して、米国の虎の子の新鋭戦艦「ノースカロライナ」の左舷水線下七メートルほどの所に命中し、直径十メートルに及ぶ大穴を開けるといふ戦果を挙げ、五・五度の傾斜をさせ戦場から離脱させた。

さらにもう一本は「ノースカロライナ」の後方数百メートルを進行していた駆逐艦「オブライエン」の艦首に命中し、同艦も修理のため戦場から離脱したが、その修理の不十分のためか後日、サモア沖の海域でついに沈没したといわれる。

このように警戒厳重な機動部隊を襲撃し、一撃で空母一隻を撃沈、さらに駆逐艦一隻撃沈、戦艦一隻撃破という大戦果を挙げたという事実は、世界戦史には空前の記録であった。

この作戦後、「伊十九潜」は、ガダルカナル島の陸軍部隊への食糧輸送と重症患者の収容という重責を数回行い、次いでフィジー、サモア海域へ

進出して通商破壊作戦に従事し、数隻の敵商船を撃沈、撃破する等の戦果を上げて、昭和十八年九月九日に、トラック島基地に帰投、入港した。

私は、同十八日、高練へ入校のため、この地で退艦することとなった。

その後の「伊十九潜」は、同十月十七日、トラック島を出て、ハワイ方面の索敵、監視作戦に向かい、十一月十九日、ギルバート諸島タラワ方面へ急航を下令され、午後六時二分、情況報告後消息不明となり、昭和十九年二月二日、歴戦の武勲に輝く「伊十九潜」も第二潜水隊司令岩上少将以下百四人の戦士と共に戦没が認定されることとなった。

【解説】

体験記筆者は、大正十二（一九二三）年一月、石川県石川郡笠間村に生まれ、家族は父母、叔父、五人兄弟で家業は農業でした。昭和十二年三月、笠間尋常高等小学校を卒業し、東京市蒲田区今泉

町の安宅商会経営の電磁工業研究所へ入所し、昭和十五年六月、海軍志願兵として横須賀海兵団に入団する。

同年九月、第二期普通科水雷術水中測的練習生として海軍水雷学校に入校、翌年五月、同校を卒業して、「伊号第十九潜水艦」の水中聴音員として乗艦する。

同潜水艦は第六艦隊第一潜水戦隊第二潜水隊に属して近海及び南洋方面海面において訓練を行っていたが、太平洋戦争開戦を控え、臨戦準備態勢に入り、横須賀から機動部隊の前路の哨戒隊として、昭和十六年十一月二十三日、千島択捉島単冠湾に入泊、同二十六日に同湾を出撃、十二月八日の日米開戦時のハワイ真珠湾攻撃に参加している。

ハワイ攻撃の機動部隊の引き揚と共に先遣部隊に復帰して、ハワイ海面の監視・哨戒及び米空母などの追従を続け、米西海岸近くまで到達して、ロスアンゼルス港外での交通破壊戦では大型貨物船二隻を撃破している。

以後の戦歴は体験記に詳しいが、昭和十七年九月十五日の戦歴・行動の記録にも、「伊十九潜」

が米機動部隊を捕捉し、単艦よく米空母「ワズプ」駆逐艦「オブライエン」を撃沈、戦艦「ノースカロライナ」を撃破していることが詳述されている。

発射した魚雷六本、それがそれぞれ三艦を射止め、当然司令官からの祝電を受信しているが、このことを当時「ノースカロライナ」の甲板士官だったベンフリー元大佐が出版した戦記にも記載され、「信じがたい」との反論も上がったという。

これを契機として昭和六十一年、米国のウィルミントンの記念艦「ノースカロライナ」艦上で日米の合同の慰霊祭が開催されることに発展している。このことは筆者の『戦いすんで』の記事に詳しい。

「伊十九潜」は排水量二千四百トン、昭和十六年に就役した長大な航続力を持った新鋭艦であった。艦首の発射管六基、新型の「九五式魚雷」の頭部には四百五キロの高性能ピクリン酸炸薬が充

填され、四十五ノットで一萬二千メートルを無航跡で航走するという。

『戦いすんで』の記述によると、「ワズプ」攻撃後、「伊十九潜」は直ちに在トラック島司令部に戦闘報告を発信し、ワズプ型空母一隻を雷撃したことを報告したが、それ以外の報告はしていない。結局日本側はワズプ以外の艦に魚雷が命中していたことは全然知らなかったのである。・「伊十九潜」は米海軍に対して、真珠湾以降最大の痛打を加えたもので、戦いの女神は一方にのみ微笑みかけ、他方に対しては侮辱的態度をとった。

しかしながら、「伊十九潜」の戦果は幸運のみによるものではなく、木梨艦長が熟練と精緻に基づいた正鵠行動により好機を生かしての戦果であると考え、まさに熱烈な報国の念の賜物と言えよう。

現在でも木梨艦長に仕えた旧部下たちは、海軍軍人の榮譽と、その戦史上でも異例の功績を上げたのに寄与したことを誇りとしている。